

多様な学びの場 把握を

不登校に歯止めがかからないことなどを背景に、東京学芸大（東京都小金井市）がフリースクールなど学校以外の教育現場の現状について教える科目「多様な学びと子ども支援」を新設した。4月の開講を前に、責任教授の加瀬進さん（同大特別支援科学講座）に狙いを聞いた。

東京学芸大

加瀬 進教授に聞く

「子どもが不登校になった場
合、本人がまずどうしたいの
か、その子にとって何が最善か
を考えると、本人がまずどうしたいの
な選択肢があるのかを学校が正
確に把握していなければ、適切

3千人、高校中退者は約5万3千人に上る。学校に通えない子どもへの支援は近年、ますます重要になっていく。だが、現状では体制が十分とはいえず、「学校に復帰させることが最善」と考え、フリースクールなどに偏見を持つ教師も少なくないという。

不登校の中には「学校がしんどい」という児童、生徒だけではなく、「もっと違った学びをしたい」と感じている子どももいる。

とができない。結果として子どもは行き場を失い、引きこもりにつながる可能性もある」

東京学芸大は2015年度に教育学部を再編。「多様な学びと子ども支援」は、新たに設置したソーシャルワーカーの養成コースに、選択科目として設けた。フリースクールをはじめ、同じく子どもの自主性を重んじるシユタイナー学校やサドベリースクール、外国人学校の運営者らを講師に招き、さまざまな学びの場の実態について解説する。全15回の講義を隔年で実施する。

教育界には、フリースクールなど学校以外の教育について

不登校の子ども支援



「最善」考え指導必要

な指導は難しくなる」
2014年度の調査によると、不登校の小中学生は約14万

人。指導側の視野が狭いと、本人が望むような場所につなぐこ

「公教育の軽視につながる」という意見も根強いが、加瀬教授は「躰台を超え、まず現状を知ること」に意義がある」と強調する。

原則としてソーシャルワーカーを志望する学生向けの科目だが、加瀬教授は「教員を目指す学生にも、ぜひ履修してもらいたい」と話す。「専門スタッフと教員とが一緒になって問題に取り組み『チーム学校』を実現するためにも、学生時代からの連携が望ましい」



かせ・すすむ 1960年東京生まれ。87年東京学芸大大学院修了。京都教育大勤務を経て、2010年から東京学芸大教授。



「フリースクール東京シユレ王」のフリースペース（東京都北区）